
Solemnis

柊 雪華

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Solemnis

【Nコード】

N0843Q

【作者名】

柊 雪華

【あらすじ】

「Vocalise」後日談。

社会人になってからの真紀は、仕事に英敏との恋愛にと忙しくも幸せな日常を送っていた。

そんなある冬の日、英敏が思いがけない言葉を口にする。それは、英敏が所属する社会人コーラスからの真紀へのオファーだった。

新しい出会いや様々な障害、そして英敏との恋愛。様々な変化が真紀に訪れる。

そして定期演奏会本番、真紀と英敏、そしてコーラスの面々はどの

ような思いで舞台に立つのか……。

Suite・1

市役所に採用されてからの1年は実に忙しいものであった。とにかく研修の嵐、そして総務の仕事は全部署を掌握する大事な仕事。

でも、いつものように仕事をして、昼休みには英敏の車で一緒にお弁当を食べる、そしてまた仕事に戻る。そんな生活が続いていた。それは高校生のときには考えられないほど穏やかな時間だった。このまま穏やかな時間が流れてくれれば……

それは、真紀がのんびりとそう思っていたある日のこと。

「また合唱、やってみない？」

英敏にそう切り出されたのは、ある冬の日の昼休み。どうやら先日 of 市民文化祭で歌った歌劇「トスカ」のアリア「私は歌に生き、愛に生き」が好評を得て、英敏の所属する社会人コーラスからオフ・ア-が来ているというのである。

そういえば大学時代からレッスンも発表会もコンクールも全部独唱だったので、合唱からはすっかり離れてしまっていた。

「うーん、そうだね……ソロも楽しいけど、誰かと一緒に歌いたくなってしまうから」

「じゃあ決まりだね」

「……つて、えっ!？」

あまりに突然の決定にあんぐり口を開けっ放しにしてしまう真紀。一方の英敏はすっかり満足した様子で、

「練習は毎週水曜の夜7時から9時まで、ただし演奏会前は土日の午後からの練習もあり。場所は文化会館の第1会議室。編成は混声四部合唱。今は来年10月の定期演奏会に向けて練習してるよ。今年の定期演奏会は終わったからね」

と、初めて会ったときのような、歌うような流れるような口調ですらすらと必要事項を述べていく。

「次の定期演奏会の目玉はミサ・ソレムニスOP・123だから。真紀だったら絶対ソロで活躍してくれるってみんな期待してる」

「え、ちよつと待って、私まだ返事してな……」

「じゃあ父さんに連絡しておくね、合唱団に強力な味方が一人増えました、つと」

初めて出会ったときを思い出す。半ば強引にヴォカリーズを歌わされ、それを絶賛した坂崎と部員一同に、サマーコンサートのプログラムに急遽投入されたこと。つらい思い出もあったけれど、この曲のおかげで、英敏のおかげで、真紀は孤独から解き放たれ、笑顔を取り戻したのだ。

英敏はいつもそうだ。人懐っこい笑顔の中にちよつとしたいたずら心や強引さも兼ね備えていて、半ば無理やりにピアノソナタ「熱情」の第一楽章を聞かされたりしたこともあったな、と思い返す。

英敏は、実は高校時代から変わっていないところがあるようだ。もつともそれは真紀も一緒なのだが。

やがて満足そうに携帯電話を閉じた英敏は、真紀手作りの弁当に入っているだし巻きを口に放り込む。

「さすが真紀。何作っても美味しい」

「ありがとう……でも、本当に私がその合唱団に入ってもいいの？」

「当然だよ、みんな真紀と一緒に歌いたいって言ってる」

そんな会話を続けながら、一緒に弁当を食べる。結局例によって真紀が根負けして、その合唱団に入団することが決定した。

翌週の水曜日。時間ギリギリで仕事が終わったので英敏を待って、練習会場たる文化会館の第一会議室に向かっていた。

舞台に立つときよりもレッスンを受けるときよりも真紀は緊張していた。高校時代に孤立していたのも実は人見知りが一因だったりするのだ。

「大丈夫だよ、みんな優しい人ばかりだから」

「って言うけどさ、人見知りするものはするんだもの……」

ぶつくさ言いながら、英敏の後ろについて歩く。実は文化会館は市役所の裏にあるので仕事帰りに徒歩で行ってもさして問題はないのだ。

英敏が差し出してきた手をそつと握り返す。その手は酷く冷たくて骨ばっていて、あたたくやわらかい真紀の手とはまったく別物だった。手を繋ぎ、新雪を踏んでそつと歩くのは二人にとつてとても幸せなことだった。

やがて文化会館の入り口近くに着くと、どちらからともなくそつと手を離す。

向こうからやってくるのは中年の男女2人。どうやら英敏の知り合いらしい……と思つたら。

「そうかー、その子が英敏の彼女か。可愛いし真面目そうじゃないか」

「あなたが林真紀ちゃんね？はじめまして。英敏の母です」
何たる不意打ち。これが英敏の両親との邂逅だった。

結局滝島一家とともに第1会議室へ足を踏み入れる。すると既に数人の中年から壮年、老人にいたるまでかなり平均年齢の高いメンバーが揃っていた。あまりに予想外のメンバーに、思わず辺りを見回してしまう。

「20代は僕と真紀だけだよ」

こつそりと英敏が耳打ちしてくる。英敏は幼い頃からこの合唱団に所属していて、ピアノ伴奏やテノールでの歌唱を受け持っている。なので当時から非常に可愛がられていて、そのような状況は今も続いている。

「あらー滝島さんから聞きましたよ！市民文化祭のあの歌声、すごく素敵でしたよ」

「この方が芹沢さん。発声の指導を担当してる」

英敏がその中年女性を紹介すると、芹沢と呼ばれた女性は深く一

礼。

「はじめまして、林です。よろしくお願いします」

同じく一礼を返すと、

「そんなにかしこまらなくてもいいのよ。ここはみんなの交流の場でもあるんだから」

そう言葉を返された。確かに練習前というのもあって、それぞれ雑談をしている者や楽譜の確認をしている者、実にさまざまだ。

「こちらが指揮と指導を担当してくださっている大嶋先生」

白ひげを蓄えた恰幅のいい男性のところに案内され、芹沢と同じく自己紹介が行われる。

「いやあ、君の事は市民文化祭のときから注目していたんだよ。僕は大嶋。今後ともよろしく」

「ありがとうございます。それでは改めて、林真紀といいます。よろしくお願いします」

そして握手を交わす。パート分けしてもらい、真紀はアルトに所属することになった。更に知り合いが隣にいるほうがいいだろうとの判断で、英敏の左隣に席を置くことになった。

「まだ楽譜が揃っていないでしょう？じきに揃えるといいわ。それまでは私の楽譜と一緒に見ましょう」

揃っていない楽譜というのは恐らく英敏の言っていたミサ・ソレムニスのことだろう。他の楽譜は大嶋が用意してくれていたため一通り揃っている。

ミサ・ソレムニスの楽譜と一緒に見ようと提案してくれた上品な女性は川原と名乗った。

まずは「犀川」や「ふるさと」、「遥かな友に」などおなじみの曲で喉を暖め、休憩を挟んでからミサ・ソレムニスの練習が本格的に始まる。

コンクールには出場しない、割とゆるい活動をしていると英敏からは聞いていたが、この曲に関しては違った。大嶋の厳しい指

導。怒号こそ上げない、違った意味での、音楽性での厳しさだった。

練習が終了した後も会場に残る者は多い。真紀は数年ぶりの入団者、しかも英敏と同じく歳若いということで大いに喜ばれ、様々な人にひっぱりだこだった。

「真紀ちゃんは今英敏君とどこで知り合ったの？」

「あ、あの、えっと、高校が同じで……私は大学に行ってからこの市役所に勤めるようになったんですけど、先に英敏君が市役所に入って」

「なるほどー、そういうことだったのね」

「はい。高校生の頃から英敏君にはとてもよくしてもらっていて、柔らかな笑みで答える真紀。大学に行っている間に真紀は随分変わったと英敏は思う。自分のいない四年間、いったい何が起こっていたのだろう。気が気でない。

結局そのあとは滝島一家と別れ、真紀は一人で車を走らせて自宅に戻ることにする。仕事が忙しかったこともそうだが、英敏の両親始めたたくさんの人との出会い。

やはりあの時と同じだった。英敏の言うことは間違っていないかった。

そして、1年間の練習が始まる。

最初こそゆつたりとしたペースで練習が行われていたが、3月に突然の転機が訪れることになる。

指導を担当していた大嶋が、急病で入院することになったのだ。入院期間は約半年の予定。その間にどれだけこの難曲「ミサ・ソレムニスOP.123」を仕上げるができるのか。全ては発声練習担当の芹沢、そしてコーラス会長の北村にかかっていた。

しかし芹沢と北村の間で音楽的な解釈が異なり、北村の不慣れな

指導にやがて不満を唱える者も増えてきた。更に慢性的な資金難も重なり、練習の雰囲気は日に日に悪くなっていく。

定例会で会費が二千元から三千元に引き上げられたが、もともと二十数人しかいないこの合唱団だ、会費を千円値上げしたところでもたかが知れている。そして会場手配の手はずの悪さ。

10月には真紀も参加した市民文化祭、12月には第九の演奏会が行われるため、残っているのは11月しかない。半年の入院とは聞いていたが、それまでに本当に大嶋が回復するのか。仮に大嶋が半年で本当に復帰したとしても、本格的にミサ・ソレムニスの練習に力を入れられるのには2、3ヶ月しかないのだ。

帰宅する方向が同じなので、真紀はいつも芹沢を車で送っていた。時々北村について愚痴をこぼすこともある芹沢をなだめることが真紀のもうひとつの仕事になっていた。

——どうしてかな、高校のときみたいに楽しくみんなで歌いたいのに。

いつしか真紀の心の中ではそんな思いが去来していた。

そのことを、ある日の昼休みに英敏に話してみることにした。

「そりゃ大人になったからね。高校のときみたいに純粹に楽しんで歌ったりはできないかもしれないよ。お金や仕事も絡んでくるからね」

今度は手作りのミニハンバーグを口にしながら英敏が答える。

「でも、最近は精神的に未熟な大人が多いことも確かだよ。特に最近は、ね」

「それって、うちのコーラスのこと？」

「それもあるけどね……あ、真紀このハンバーグにチーズ入れたの？」

「え、ああ、うん……」

結局、話したいこともろくに話せず、なんだかモヤモヤしたまま仕事に戻る真紀なのであった。

その日の練習も消化不良のまま始まり、消化不良のまま終わった。「Sanctus」は一番荘厳に、崇高に歌い上げられなければならないのに……北村さんはちゃんと楽譜の解説を読んでいるのかしら。ため息をつく芹沢。今日も結局楽譜をなぞるだけで終わってしまった。つて、曲想などというものはとても表現できないままだった。

「そうですね、私も巻頭の解説を読んだんですが、そろそろその段階まで行かなければいけないはずなんですけど……」

実際そうである。今はもう7月、その段階の練習を積み重ねなくてはいけない時期なのだ。しかし北村の指導では一向に楽譜とラテン語をなぞる作業から抜け出せない。

「だいいち、ミサ曲のラテン語なんてみんな似たような……」というか同じものじゃないですか。Kyrie、Gloria、Credo、今日練習したSanctus、そしてAgnus Dei……曲は違えどラテン語の構成なんて全部変わらないような構成ですよ。まして毎年何かしらのミサ曲が目玉だって英敏君から聞いてますから、ラテン語の練習は皆さんも飽き飽きしているんじゃないですか？」

今度は真紀が愚痴る番だ。

「そうねえ……真紀ちゃんの言うとおりなのよ。ラテン語の中身も発音も一緒なのに、北村さんったら毎度そこから練習を始めようとするんですもの。それに真紀ちゃんはソロの練習もあるのでしょ？大嶋先生が早く帰ってきてくださればいいのだけど……」

これでは団の統率が取れなくなるのも時間の問題だった。

そして今日も、英敏と昼食をとることにする。

「今の状況は絶対まずいと思うんだ」

今度は英敏から話を振ってきた。無論、コーラスの件で。

「完全にバラバラになってて歌声がひとつになっていない。確かに北村さんの指導に問題はあるかもしれないけど、そのせいにだけしてちゃいけないと思うんだ。それに、僕たちがソロの練習にとる時間も極度に少ない」

英敏はテノールのソロを担当することになっている。今は二人で真紀のレッスン先に出向いて指導を仰いでいるが、大嶋が戻ってくれば普段の練習とは別枠で大嶋直々のソロ専門レッスンが始まるのだ。

「私も前からそう思ってた。でも、それを言おうとしたら英敏君、ハンバーグがどうのこうのって言うんだもん」

そうやって拗ねてみると、

「あはは、ごめんごめん」

と、高校時代と変わらない眩しい笑顔で笑う。そんな笑顔を見せられたら真紀も根負けしてしまうのではないか。

「それにしても、暑いね……」

真紀がひとつため息をつく、英敏も頷く。

「こっちは相当北のほうなんだけど。東京はもっと暑かったんじゃない？」

「そうだね、ビル風とかものすごく暑かった」

しばらく他愛無い話を続けていたら、不意に英敏が真面目な表情になる。

「ねえ、真紀」

「何？」

何とはなしに返事をする、が、やはり英敏の瞳はピアノに向かっているときのように輝いていて。

「もうすぐ真紀、誕生日だね」

「そうだよ？どうしたの？」

やっぱりというかなんというか。この二人は進展が物凄く遅いだ。片方が鈍ければこんなことになってしまう。英敏は名前に入っ

ている文字のとおり目敏いところがあるのだが、真紀は純粹培養の鈍感な（音楽に対してだけは敏感な）人間だ。

まして英敏は実家暮らし。結果、進むものも進まない。真紀はまったく気づいていなかったが、英敏はそれにやきもきしていた。

——いい加減、決着つけなきゃな。

「いいプレゼント探すから、期待して待ってて」

英敏は心を決めて、そう言うのであった。同時に業務再開を告げるチャイムが鳴った。

「ありがと、じゃあお互い仕事頑張ろうね！」

走り去る真紀の背中を眺め、やがて業務再開のチャイムが鳴ったことを思い出し、英敏は慌てて自分の部署に戻ったのである。

その日の終業後、英敏は一軒の宝石屋に足を踏み入れていた。真紀の指のサイズはペアリングを買ったときに教えてもらったから知っている。

——問題は、真紀がどんなデザインが好きなのか、だよな。

結局、店員と相談した結果、ハート型のダイヤモンドの両脇をピンのメレダイヤで固めるデザインに決めた。それを丁寧にラッピングしてもらい、鞆に入れる。

これで、真紀の誕生日の手はずは整った。

Suite・2

真紀の誕生日。その日は真紀も英敏も定時で仕事が終わった。真紀は割と定時で仕事が終わることが多いのだが、英敏の部署は忙しいため定時上がりは稀である。実はその日の昼休みに、定時で終わるから一緒に食事でもどうかと英敏から持ちかけられていたのだ。

最初は英敏の両親のことを考えて断ったほうがいいのかと思ったのだが、やはり例によって英敏に押し切られてしまった。

レストランといっても田舎の小都市ではたかが知れたもので、英敏は小さなフレンチの店の予約を取っていた。しかし扉を開けると重厚な調度品や絵、そして市内の夜景を望むロケーション。ここまですれば、さすがの鈍い真紀でさえ何が起こるか薄々感づくことになる。

——もしかして、英敏君は……。

人生で初めて食べた高級フレンチの味は、あまりに緊張していたため覚えていない。それは真紀も英敏も一緒。もつとも、店の雰囲気だけでない緊張感も二人の間には漂っていたのだが。

店を出て、英敏の車に乗った後のこと。本当は一番ワインを飲みたかったであろう英敏だが、今日は真紀をマンションに送り届けるために酒には一切手をつけていない。そんなわけで英敏は、素面の状態でこのこそばゆい状況を作り出すことになる。

「ねえ、真紀。ちょっといい？」

「うん……どうしたの？」

真紀の頬にはほんのりと赤みが差していた。飲み慣れないワインを飲んだせいだろう。いや、それだけではないはずだ。英敏は訳もなくそう確信していた。

「これ、受け取って欲しいんだ。僕からの誕生日プレゼント。ここで開けていいよ」

言われるままにラッピングのリボンを解き、小さな箱を開ける。
そのなかには指輪が入っていた。ダイヤモンドの輝く指輪が。さすがにこれがなんなのかが分からないほど真紀は鈍くない。

「真紀。僕と結婚して欲しいんだ」

「あ……」

「僕は本気でそう思ってる。ずっと真紀と一緒にいたい、って」

その瞳は真紀が見てきた中でも一番真剣なものだった。ピアノを弾いているときとも伴奏をしているときとも歌っているときとも違う。

でも……。

「英敏君」

静かにラッピングを元に戻すと、その小さな箱を英敏に渡す。

「ごめんね。今はまだそのときじゃないと思うの」

「……どういうこと？」

高校時代、過去をさらけ出したときと同じ哀しげな瞳の色。酷く心が痛んだが、「いまこの瞬間」この指輪を受け取ることは、真紀にはできなかった。高校のときと変わらず真紀は不器用で、今のコーラスの状態を考えると、簡単に英敏の申し出を受けすることはできなかったのだ。いずれ時期がくれば、とは真紀も心のどこかで思っていたのだが、その瞬間は予想していたよりも早く訪れてしまった。「私もいつかは、って思ってたよ。でも今はまだ早いと思うの。合唱の方もゴタゴタしてるし、私の親に英敏君のことを紹介したり、色々準備をしたりするのはとても難しい。だから、定期演奏会が終わるまでは待っていて。その時に改めてその指輪を受け取るから」
帰りの車内では、どちらも言葉を交わさなかった。

やがて大嶋が退院し、ようやくいつものどおりの練習が始まった。予想外に術後の回復が良かったのだという。予定の半年より1ヶ月ではあるが早い退院。これはコーラスのメンバーにとって大きな励みとなった。一方の北村も安心して自分の歌に専念できる。

「さて、ミサのソロ担当者は練習終了後に僕の家のレストランに来るように」

午後9時。練習が解散になったあとは大嶋家のレストランに集まってソロの練習をすることになった。

「では、Credoより、Et incarnatus estを」
各々がページを開き、自分のパートを指導してもらう。

「林さん、そのcarnaのB音がどうしても低くなり気味になっ
てしまつからそこは気をつけるように」

「はい」

真紀も英敏も、いつも以上に真剣である。

「次回の練習からはソロも入れてやるので各自しっかり練習しておくように。そろそろ時間も遅いので解散としましょう」

英敏と真紀は言葉を交わすことがなかった。あの夜以来なんとなく
く気まずい雰囲気が続いている。昼休みに一緒に食事を取るの
はかわりないのだが、話題がどうしても合唱の方に流れてしまう。
あの夜のことは二人の中では「なかったこと」になってしまっていた。

そして大嶋の指示通り、翌週からソロを交えた練習が始まった。

英敏はテノールのソロをすることになっていたので、ピアノは北村の妻が弾いていた。今日の練習は「kyrie」を中心として行われていた。ソロを担当する4人の「christe eleison」の旋律が複雑に絡み合う。大嶋の指導にも熱が入る。

いつしか季節は移ろい、文化会館の前にある桜の並木道は紅葉し始めていた。

10月になって、オーケストラとの合わせ練習が始まった。市民文化祭の合唱部門の練習も兼ねているため、練習時間は長い。

オーケストラとピアノ伴奏ではやはりなにかが違う。いつもより増す緊張感。張りりと艶を増した真紀の歌声に、誰もが感嘆する。英

敏も、自分のいなかった4年間の差を感じる。

練習の翌日、久しぶりにコーラスのこと以外の会話をした。

「真紀は大学にいた頃どんなふうに暮らしてたの？」

「うーん、ひたすらレッスンと声楽の勉強かなあ、あと友達もたくさんできた。今でも連絡とったりしてるよ」

「男友達とかは？」

「いたにはいたけど、最後には必ず告白された。英敏君のことがあ
るからかたっぱしから断ったけど」

「ってことは……」

「うん、4年間ずっと英敏君のことは忘れてなかったよ」

その言葉に何故か安心する英敏。

「僕だって、忘れたことなんかないよ」

久しぶりの、あたたかい時間。たわいない会話。それがどんなに
幸せなことなのか、二人は気づいたのだった。

「相変わらず真紀の作るものは美味しいね」

「花嫁修業の一環です」

二人で笑いあう。この時だけは合唱のことを忘れていられた。で
も、土曜日にはまたオーケストラとの合わせ練習が待っている。そ
して日曜は市民文化祭。しかし二人にはソロを任されたプレッシャ
ーすらなかった。

日曜日。真紀は楽屋で青いカシユクールタイプのブラウスに黒の
ロングスカートという出で立ちで出番を待っていた。床すれすれの
丈のスカートは、気を付けていないと裾を踏んでしまいそうになる。
これが真紀たちの所属するコーラスの衣装である。

「真紀、もう準備できたの？」

「うん」

そう言う英敏も黒いスーツに蝶ネクタイという出で立ちだ。去年
も英敏のこの姿は見たことがあった、しかし真紀の衣装はその時と

は違う。昨年はソロ専用の黒いドレスを着ていたからである。

「衣装、似合ってるじゃないか」

「あはは、このブラウスはちよっと着慣れないけどね」

黒いドレスは大学時代からずっと使っていたものなので、カシユクールブラウスを着るのは初めてである。胸元の開き方が少し気になったので、川原から安全ピンを借りて目立たないように留めてある。この服装だとドレスより体型が目立つのが気になった。英敏は真紀の姿をどう思っているのだろう。

やがて真紀たちの所属するコーラスの出番がやってきた。合唱曲の定番ともいえる「犀川」と「遙かな友に」の2曲を歌い上げ、最後はミサ・ソレムニスOP・123より「Kyrie」を歌うことになっている。定期演奏会の宣伝も兼ねているし、場数を踏んでおけばいざという時も安心だ、という大嶋の提案があったのだ。

最後は参加者全員で「少年の日はいま」と「大地讃頌」を歌う事になっている。真紀は中学時代にソプラノでこの2曲を歌ったことがあるが、今ではアルトでこの曲を歌っている。そう思うと少し新鮮な気持ちになった。そして、改めてこのコーラスで頑張っていることと決心したのであった。

Suite・3

11月。定期演奏会を目前に控え、練習の緊張感はピークに達していた。同時に団員の疲労もピークに達していた。しかしここでくたばってしまうわけにはいかない。休み時間には北村の妻が用意したのど飴が配られるようになっていた。

一時はバラバラになりかけたこのコーラスも、今は定期演奏会に向けて一致団結している。高校時代の合唱コンクールやサマーコンサートでの練習を彷彿とさせるその現象に、真紀も英敏も胸を熱くさせた。ソロの練習にも更に力が入る。

そう、高校時代に最後に歌ったヴォカリーズのように。

オーケストラとの合わせ練習にも団員たちはすっかり慣れた様子で、本番に向けて心配することは何もなかった。強いて言うなれば、ミサ・ソレムニスはかなり長い長丁場になるため団員たちの体力が持つかどうかだった。

午前9時。文化会館の楽屋には次々と団員たちが集まっていた。まずは先日と同じ青いカシユクールブラウスに黒のロングスカート、といういでたちになる。ミサ・ソレムニスになると今度はそれが白いカシユクールブラウス……になるのだが、真紀はソロを担当するので黒いドレスを着ることになっていた。

午前中は合唱の定番曲の練習、午後からはオーケストラを交えてのミサ・ソレムニスと、ラストを飾る大地讃頌のオーケストラバージョンの練習になった。ソプラノとバスのソロ担当はコーラスの関係者に頼んでいる。最初は合わせるのにさえ一苦労したが、何度も打ち合わせと練習を重ねた結果、今では同じ団員のように上手く歌声を合わせることができた。

午後5時半。受付では既に長蛇の列が出来ていた。市内のあちこ

ちに協賛を得てポスターを張ってもらったり、市民文化祭のアナウンスで宣伝をした結果である。また、コンクールには出場しないにもかかわらず実力のあるコーラスでもあるし、何より昨年独唱で好評を得た林真紀がソロを務めるということで、様々な方面から注目を浴びていたのである。

そして午後6時の開演。壇上に登った真紀は、あまりの観衆の多さに一瞬圧倒された。立ち見が出るほどの観衆。その期待に応えるべく、団員たちは熱唱した。自分たちの活動の楽しさや歌うことの喜びを伝えるために。

第3部のミサ・ソレムニスが始まる前の休憩時間に、真紀は黒いドレスに着替える。スカートの部分にスパンコールとビーズがあしらわれた、上品でいて可愛らしさも兼ね備えたドレスである。昨年同様に英敏が心奪われたのは言うまでもないだろう。

第3部。再び団員たちとソロ担当の4人が舞台に立つと、観衆の盛大な拍手に迎えられた。

大嶋がタクトを振る。オーケストラの演奏が始まる。そして、団員たちの「kyrie」の合唱が始まり、その直後に英敏のテノールが力強く響き渡る。そして再び団員たちが「Kyrie」と歌いあげると、今度はソプラノのソロ。次はアルトのソロ、そして合唱へと続く。

そして「Gloria」、「Credo」、「Sanctus」最後に「Agnus Dei」と続いていく。

「dona pacem pacem」

長丁場のミサ・ソレムニスも、これでついに終わりを迎えた。続いてオーケストラの伴奏による「大地讃頌」が歌われ、花束の贈呈と鳴り止まない拍手を受け、定期演奏会は終わりを告げた。

指揮者である大嶋、そして団長の北村を中心に、ソロを担当した4人、そして団員たちが一枚の写真に収まる。

「はい、OKです！」

カメラマンの声が聞こえた瞬間、堰を切ったように真紀の瞳から涙が溢れ出した。やれることは全てやりきった。そんな思いで心が満たされていた。それは、かつて先輩の茜とともにサマーコンサート終了後に涙を流したのと同じ理由だった。花束を抱え、真紀はただひたすらに声を押し殺して泣いていた。

そして、今度は英敏がその涙を拭う番。かつてできなかったことを、今果たそう。今なら、できる。

英敏が真紀にそっとハンカチを手渡す。

「え……」

「高1の時は、僕には真紀の涙を拭えなかったからね。そんな勇気があの時はなかったから。でも、今ならできる」

「英敏……君」

もはや、真紀には周りなど見えなかった。英敏の腕の中に飛び込んで、真紀はついに声を上げて泣き出した。団員たちの中にはもらい泣きする者もいた。彼らはそれほど感動的な合唱をやり遂げたのである。

そんなことがあって、真紀と英敏の仲は団員たちの知るところとなってしまうのは言うまでもないだろう。更に、英敏の家族にもすっかり公認となってしまうた。着替えも終わり、打ち上げの時間になったときはさんざん団員たちに冷やかされたものである。

帰り道は団員たちが気を利かせて、英敏に真紀をマンションまで送るようにと言った。

「終わったんだね……」

真紀が一つため息をつく。その息は白い。冬はもうすぐそこだ。「今年はね。来年もまたソロやつてもらうから」

「つて、えっ!？」

そして再び突拍子も無いことを言い出す英敏。すべてが、日常に還ろうとしていた。

「あはは、冗談だよ」

言いながら、英敏は衣装の入った鞆の中からラッピングされた小さな箱を取り出す。その箱に真紀は見覚えがあった。いや、見覚えがあった、じゃ済まされない。

それはかつて、自分の誕生日に渡されたが、自ら英敏に返してしまった物。

「これ。今度は受け取ってくれるよね？」

「あ……」

そうだった。真紀はあの日、こう約束していたのだった。

「私もいつかは、つて思ってたはいたよ。でも今はまだ早いと思うの。合唱の方もゴタゴタしてるし、私の親に英敏君のことを紹介したり、色々準備をしたりするのはとても難しい。だから、定期演奏会が終わるまでは待っていて。その時に改めてその指輪を受け取るから」

時は満ちた。今受け取らない理由が一体どこにあるというのか。

真紀は今度こそ、しっかりとその箱を受け取った。箱の中ではあの指輪が街頭に照らされて、あの時と変わらずに輝いていた。

「でも英敏君、親御さんからは……」

「むしろまだ結婚しないのか、つて急かされてるぐらいだよ」

屈託の無い笑みに導かれるかのように、その指輪を手に取り、左手の薬指にはめてみる。サイズはぴったりだった。

「真紀、もう一回言っね」

不意に、英敏が笑みを真面目な表情に変える。

「僕と、結婚して欲しいんだ」

しっかりと、真紀の瞳を見据えて。英敏は、一語一語を噛み締めるかのように自らの想いを真紀に告げた。しかし真紀は目を伏せた

ままなんの反応も示さない。今回もだめなのか。英敏がそう思った瞬間だった。

「……はい！」

真紀の頬に涙が一筋伝い落ちる。震える声で、しかしはっきりと真紀は英敏のプロポーズを受けたのであった。

そこからは早かった。真紀が英敏を両親に紹介したところ、結婚を快諾してくれた。それは英敏の両親も一緒に、話はトントン拍子に進んでいき、年明けの仕事始め、朝一番に婚姻届を提出した。

やがて結婚式と披露宴が行われ、二人はたくさんの人々からの祝福を受けた。もちろんコーラスのメンバーは余興で合唱を披露してくれた。そして、真紀と英敏も余興の舞台に立つ。用意されたピアノ。マイクなどいらない。

二人が演奏し、歌ったのは思い出のあの曲、ラフマニノフのヴォカリーズだった。

Suite・3（後書き）

Vocaliseの後日談を書きたいなーと思いつつ数年間放置していましたが、ついに完成にこぎつけることができました。

一番苦労したのは、ミサ・ソレムニスOP・123の「音源を探すこと」でした。苦笑

図書館をハシゴしてやっと音源を借りて聞いたときは感動ものでした。

おそらくこの音源と手持ちの楽譜がなかったらこの話は完成どころか構想すら生まれなかったでしょう。

れでは、ここまで読んでいただきありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0843q/>

Solemnis

2011年1月20日17時25分発行